

本間祐介氏と渡辺華山のこと

本間美術館 館長 田中章夫



渡辺華山と言いますと、私が最初に思い出すのが、当館館長を務めた本間祐介氏です。祐介氏が昭和五十八年（一九八三）に七十六歳でお亡くなりになられてから二十七年が経ち、人々の記憶からも薄らいでいるように思われますので、紙面を戴き祐介氏と華山のことを記させていただきます。

本間祐介氏は明治四十年（一九〇七）酒田に生まれ、本間家の全盛期に青春時代を過ごしています。当時の本間家の当主は祐介氏の伯父にあたる八代本間光弥で、学問や書画をはじめ諸般に通暁して博学多才で知られ、文教の育成にも尽くした人格者でした。

祐介氏は酒田中学校から上京、二松学舎専門学校に学んだが、昭和四年（一九二九）の光弥の死とともに二十三歳で酒田に帰郷、庄内竿の製作技法を修得し、翌年釣道具店を開きます。本間家一族の多くは、宗家が営む会社や事業に就職するのが一般的であったが、祐介氏は若くして独立、己が心のままに生きる道を求めていきます。このことは多感な時代に受けた光弥の影響があるように思います。さらに、若年より本間家収蔵の多くの書画を身近に観て育ち、そこに光弥の薫陶と本人の美への探求心も加わり、書画への愛着は祐介氏の人格の一部ともなっていました。

ところが、昭和十八年（一九四三）九代当主本間光正は応召に際し、三十六歳の祐介氏を本間家の後見人とし、一切を任せました。同族の一人として、宗家を守ることは責務であり、当主から信頼され、後事を託されたことに、責任感の強い祐介氏は、自らの生き方を捨てて宗家を守り抜く覚悟を決めます。その後、祐介氏は光正の病死、日本の敗戦、農地解放と重なる、戦中戦後の激動の時代に、一身に責任を背負い、宗家を守り、再興へと力を尽くしました。他にも、戦後の活躍は経済、文化と多方面に渡り、特に、昭和二十二年（一九四七）戦後全国に先駆けて本間美術館を開館、敗戦後の日本人に誇りと自信を与えた意義は大きい。

一方で、時代と人々の要請が、祐介氏をして美の探求者としての本来の自分を隅に追いやっていくように思います。時に美術館の仕事に没頭したり、作品鑑賞に訪れるのが本来の心を保つ手段であったようです。



本間祐介氏

ところで、書画好きは祐介氏でしたが、どちらかと言えば絵画が好きで、時代、流派を問わずそれぞれ美しさ、良さを楽しんでいました。雪村、池大雅等、何人かの好きな画家がおりましたが、渡辺華山もその中の一人でした。開館の翌年、昭和二十三年（一九四八）に逸速く「渡辺華山展」を開催していることからわかります。

祐介氏は画業と藩務の間で悩みながらも、現実を直視して逃げだすことなく誠実に生き、独自の絵画を作り上げた華山の人と芸術を深く尊敬していました。私には境遇はちがいますが、祐介氏は華山の生涯と自らの歩んできた道を重ねて見ていたように感じられました。今でも、昭和五十四年（一九七九）に開催した「渡辺華山展」の折に、食い入るように作品を拝見していた姿が眼前に思い出されます。

華山の人と芸術の良き理解者だった祐介氏を皆様心に留めていただければ幸いです。

嚶鳴フォーラム 開催について

嚶鳴フォーラムは、現在田原市以外に全国で十二の市町が加盟している嚶鳴協議会が開催するもので、規約に「ふるさとの先人を活かしたまちづくり、人づくり、心そだてに取り組んでいる自治体が力を合わせ、その取り組みを全国に情報として発信することともに、切磋琢磨し、先人の志と行動力に学ぶ元気な地方の交流を図ることを目的とする」と定められています。市長・町長や教育長が、テーマに沿ってそれぞれのふるさとの先人の紹介や、先人を活かした取り組みを発表しています。

平成十九年七月に、ふるさとの人物を街おこしの起爆剤と考えた愛知県東海市からの呼びかけによって始まりました。そのためのアイデアを歴史小説家童門冬二氏（愛知県東海市立細井平洲記念館名



誉館長）に相談したことで、平洲の弟子たちの出身地が集い、ネットワーク作りを始めたことがきっかけでした。

「嚶鳴」とは、江戸時代の儒学者で、現在の東海市出身の細井平洲の私塾「嚶鳴塾」にちなんだもので、中国最古の詩集『詩経』にて

てくる言葉で、鳥が仲間を集めて鳴き交うという意味で、この塾には、諸大名も学び、米沢藩の財政再建を成功させた上杉鷹山もその一人でした。

第一回は、東京で「元気な地域づくり、日本づくりのために」をテーマとして開催されました。第二回からは、加盟各市で持ち回りで開催することになり、滋賀県高島市で開催されました。田原市はこの第二回からの参加でした。続いて、岐阜県恵那市、大分県竹田市、愛知県東海市、今年には山形県米沢市で開催されます。

高島市でのテーマは「未来を担う子どもたちのために、今、なすべきことは？」、恵那市では、「生涯学習と学校・地域での教育のあり方を探る」、竹田市では「ふるさとの先人を、まちづくり、人づくり、心そだてに活かす」地域力を高めるために、愛知県東海市では「いのちを守る生き方・考え方を学ぶ」釜石からのメッセージ」でし

目次

題字「華山会報」元華山会理事

故小澤耕一氏

P ① 本間祐介氏と渡辺華山のこと 田中章夫

P ② 嚶鳴フォーラム開催について

目次

P ④ 渡辺華山『毛武游記』⑥

P ⑧ 博物館収蔵品から渡辺華山筆

『客坐掌記(天保九年)』⑦

P ⑩ 「少年物語 渡辺華山」

読書感想文について

P ⑭ 華山の田原行(十三)

P ⑯ 財団法人華山会からご案内
田原市博物館

た。昨年は、岩手県釜石市で開催予定でしたが、東日本大震災により、開催が困難となり、姉妹都市である東海市での開催となりました。震災における釜石市および協議会参加各自治体の経験を事例にし、ふるさとの災害の歴史や先人の経験・知恵を持ち寄り、これからの地域づくり、とくに「いのちを大切に作る地域づくり」のあり方を探り、嚶鳴協議会参加自治体からの事例報告を提言として広く発表、広域連携を提案しました。今年の山形県米沢市では「これからの生き抜く上杉鷹山のこころ」なせばなる」と続いています。

嚶鳴協議会は、岐阜県大野町、岐阜県恵那市、沖繩市、神奈川県小田原市、岩手県釜石市、佐賀県多久市、大分県竹田市、長野市、山

形県米沢市、愛知県東海市、島根県益田市、大分県日田市が加盟しています。

平成二十五年は田原市が誕生し、十年目の年を迎えます。また、渡辺崋山の生誕二百二十年、田原で秋に開催する予定です。

市博物館の開館二十年とも重なり、七回目の嚶鳴フォーラムを田原市

ふるさとの先人を まちづくり、人づくり、心そだてに活かす

おの めい

嚶鳴フォーラム in 米沢

「なせばなる！」
～これからの生き抜く上杉鷹山のこころ～

- 基 講 演 「はやぶさの帰還」 上杉邦道氏（米沢上杉家第17代当主、(独)宇宙航空研究開発機構名誉教授）
- 特別長ミット 「ふるさとの先人に学ぶ」 パネリスト：童門冬二氏（作家）、吉田公平氏（東洋大学教授）、嚶鳴協議会参加自治体市長、コーディネーター：寄田昭一氏（PHP 総研）
- 同時開催 米沢市生涯学習フェスティバル 遊学よねざわ 2012 「東北女子の能力」～しながやかに、美しく、私らしく～ 10:00～12:00

●日時 2012年 10/13 土 13:00-17:00

●会場 山形県米沢市 「伝国の杜」置賜文化ホール
〒992-0052 山形県米沢市丸の内一丁目2番1号
☎0238-26-8000

- 参加 無料、要入場整理券（入手方法はお問い合わせ下さい）
- お問い合わせ先 米沢市教育委員会社会教育・体育課
TEL:0238-21-6111 FAX:0238-21-6926
E-mail: syakyou-ka@city.yonezawa.yamagata.jp
- 開催フォーラムホームページ
http://research.php.co.jp/oumei/

釜石市 / 岩手県 大島高任 1826～1901 ●鉱山学者・事業家

米沢市 / 山形県 上杉鷹山 1751～1822 ●米沢第九代藩主

長野市 / 長野県 佐久間象山 1811～1864 ●思想家・兵学者

恵那市 / 岐阜県 佐藤一斎 1772～1859 ●儒学者

益田市 / 島根県 秦佐八郎 1873～1938 ●医学者

小田原市 / 神奈川県 二宮尊徳 1787～1856 ●農政家・思想家

大野町 / 岐阜県 所部太郎 1838～1865 ●幕末の志士

田原市 / 愛知県 渡辺崋山 1793～1841 ●田原藩家老・画家・蘭学者

日田市 / 大分県 廣瀬淡窓 1782～1856 ●儒学者・漢詩人

竹田市 / 大分県 廣瀬武夫 1868～1904 ●海軍中佐・ロシア駐在武官補佐官

東海市 / 愛知県 細井平洲 1728～1801 ●儒学者・教育家

沖崎市 / 沖縄県 島マス 1900～1968 ●沖縄の社会福祉の母

●主催 米沢市、米沢市教育委員会 ●共催 嚶鳴協議会 ●協賛 ANA ●後援 山形県、山形県教育委員会、朝日新聞山形総局、毎日新聞山形支局、読売新聞東京本社山形支局、NHK山形放送局、山形新聞・山形放送、河北新報社、山形テレビ、テレビユー山形、さくらんぼテレビ、米澤新聞、米沢日報、ニューメディア、エフエム山形、米沢職工会議所、米沢観光物産協会、米沢上杉文化復興財団、米沢コンベンション協議会

●企画協力 ㈱PI伊研究所、ANA セールス課、徳志學社 ●主催 嚶鳴フォーラム in 米沢実行委員会

ANA

渡辺崋山『毛武游記』⑥

研究会員 加藤克己

近江屋喜兵衛手代善助来る。これハ造酒屋なり。かたはら味噌、醤油、質とりて業とす。本店は近州日野にて水口侯の領なり。店も大きやかなる家に土蔵巨大なる(二三字分空白)あり。人五十人ばかりもつかふべし。

(天保二年(一八三一)十月十三日続き)

近江屋喜兵衛の手代善助が(私を訪ねて岩本家へ)来た。近江屋は酒造りの店である。その傍らで味噌、醤油を造り、質をとって家業としている。本店は近江国日野にあつて、水口侯の領地である。店もたいへん大きな家に土蔵の巨大なものがある。人を五十人余りも使っているということである。

※ 近江屋喜兵衛 名字は「矢野」。初代が近江国

日野の出身で、「近江屋喜兵衛」を商号とする。代々「久左衛門」を名乗る。清酒・味噌・醤油の醸造業のほか、質商を家業とし、桐生新町二丁目(現桐生市本町二丁目)で営業。「近江屋ズシ」と呼ばれる小路をはさんで、岩本家の向かい側。近江屋は矢野本店として現代に続いている。矢野本店は移転し、明治・大正期に建築された旧矢野蔵群は有鄰館となり、桐生市に寄贈され、市指定重要文化財となっている。

桐生市本町通



※ 近州日野

江戸時代は、近江国蒲生郡村井町・大窪町・松尾町の総称(滋賀県蒲生郡日野町)。近江商人の出身地で、豪商が多い。行政上での町名ではなかったが、商人たちの財力を基盤として通称名日野町は江戸期を通じて

て全国にその名を知られた。

※ 水口侯 近江国甲賀郡水口(滋賀県甲賀市水口町)二万五千石。藩主加藤越中守明軌。豊臣系外様大名加藤嘉明の直系。

津久井祐齋祖母母来る。これハ斎藤式右衛門が姉に松宅といふ医者の子なりけるが、松宅死して子祐齋に道ゆずり、わがいたりしをよるこびて来りはするなり。

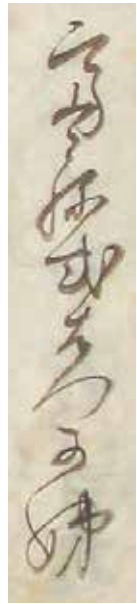
津久井祐齋の祖母母(母だけか?)が来た。これは(田原藩士)斎藤式右衛門の姉で、松宅という医者の妻であったが、松宅が死んで、子の祐齋に道を譲っており、私の到着したのを喜んでやって来たのである。

※ 津久井祐齋 一八一―一六一。桐生新町二丁目。の医者。二代目松宅(雨亭)と斎藤式右衛門の姉のぶの子。

※ 津久井祐齋祖母母 「祖母母」とあるが、「これハ」以下の説明は「母」についてのみである。祖母が来たか不明。

※ 斎藤式右衛門が姉 のぶ。これまでの解説書や注には、「姉」とするものと「妹」とするものとある。それは、原典には「姉」の異体字である「姉」が書かれているが、これが「女へんに弟」のように見えるためである。式右衛門が文化四年(一八〇七)に若殿の御伽役についた時、幼年と考えられるので、年齢を考慮しても「姉」が正しい。なお、前号にも書いたが、同様の記事が前日十二日の記事に

もあるが、この日十三日が正しいであろう。



前原藤兵衛妻来る。これは茂兵衛が親の代につかへたるものにて、世話して長持まで持せ、養子つかはし候ものなれば、予いたりしとて来。
(四行ほど空白)

前原藤兵衛の妻が来た。藤兵衛は茂兵衛の親の代に(岩本家に)仕えていた者であつて、(岩本家が)世話をして長持まで持たせて、養子に行かせたものなので、私が到着したということをやつて来た。

※ 前原藤兵衛 当時、前原家と岩本家は矢野家を挟んで近所にあつた。後に岩本家が破産すると、藤兵衛の子伝次郎は、その邸を買い取つた。

なお、この日華山を訪ねた人の名前は、すべて頭を数文字分下げて書いている。

十四日 晴

袴羽織着かえて茂兵衛、喜太郎とともにこゝろやすき人々訪ふ。又諏訪山能満寺観音院といふ。今泉村といふにあり。真言宗。こは諏訪神社あるもてかくハ呼ぶなり。むかしハ勅額ありしかバいと尊き寺なるを、たゞ寺と社の除地のみにて今おとろえたりとぞ。此寺岩本氏の墓あれ、

拝す。墓たゞ二基茂兵衛父なり。

十四日 晴

袴と羽織に着替えて、茂兵衛、喜太郎と一緒に親しい間柄の人々を訪れる。又、諏訪山能満寺観音院という(寺へ行く)。今泉村という所にある。真言宗。こは諏訪神社があることをもつてこのように呼ぶのである。昔は天皇直筆の額があつたので、たいへん尊い寺であるものを、ただ寺と社の税を免除された土地だけになつて今は衰えてしまつたという。この寺に岩本氏の墓があるので、参拝した。墓はただ二基、茂兵衛の父のものである。

※ 観音院 諏訪山能満寺。真言宗。当時の今泉村にあつた、岩本家の菩提寺。現桐生市東二丁目。桐生市重要文化財に指定されている岩本一僊(喜太郎)筆涅槃図を所蔵する。

※ 今泉村 桐生川の右岸。河水の氾濫によつて形成された河岸段丘上に位置する。現在の桐生市東及び仲町あたり。

※ 岩本氏の墓 「桐生まちなかマップ」は「渡辺華山妹茂登墓所」と紹介している。現地は鍵がかかつていて、墓所に入ることはできない。外から見るのみである。「岩本一僊ノ墓」「岩本茂登ノ墓」の二つの標柱が立っている。

なお、本誌第十号に岩本家初代、三代、四代それぞれ夫婦の墓、及び岩本家旧宅の写真が掲載されている。

※ 墓はただ二基 次を読むと三基のように思えるが、不明。

岩本家墓地



松岳良調居士 これハ茂兵衛が親也。
清蓮智法童女 これ先の養子なる正助が女なり。
玉莊徳本童女 これハ茂兵衛が女にて照とよびし。即子が姪なり。わづか二歳の時病死す。即

松岳良調居士 これは茂兵衛の親である。
清蓮智法童女 これは先の養子である正助の娘である。

玉荘（窓）徳本童女 これは茂兵衛の娘であつて照と呼んだ。即ち私の姪である。わずか二歳の時に病死した。

※ 茂兵衛が親 義父の初代茂兵衛のこと。文化六年（一八〇九）三月十二日没。

※ 正助が女 文化八年（一八一二）、六歳で没。正助は江戸の人で、初代茂兵衛の養子となり、妻を迎え、二代茂兵衛を名乗つたが、養父の没後、姑のお幸に離別され、夫婦共に江戸へ戻つた。その後、三代茂兵衛が養子に入つたのである。

※ 玉荘徳本童女 荘の字は窓が正しい。茂兵衛ともとの長女。なお、墓石の三人の人名の注は、『平成校注毛武遊記』による。

人々の名前、贈もの、しるしハ後にしるす。
夜人々来る。

（この日に訪れた）人々の名前、贈り物、印は後に記す。
夜、人々が来た。

十五日晴
昼前人々を訪ふ。昨玉上甚左衛門訪ひしに、十山亭詩碑を見ず。これハ小倉山といふ山上に、此の地の詩人佐羽淡齋なるもの所作の詩碑なり。書、此玉上甚左衛門顔魯公の集字して書せしなり。

り。淡齋が伝ハ後に記す。

十五日 晴

昼前、人々を訪れた。昨日玉上甚左衛門を訪れたけれども、十山亭詩碑を見なかつた。これは（甚左衛門の屋敷にあるのではなく）小倉山という山の上に、この地の詩人佐羽淡齋という者の作つた詩碑である。書はこの玉上甚左衛門が顔魯公の字を集めて書いたものである。淡齋の伝については後に記す。

※ 玉上甚左衛門 三代玉上甚左衛門政美。玉上家は、織物買次商岩本家の主家筋にあたる。桐生新町で織物製造と織物買次商を兼ねる。詩や和歌をよくし、白謹と号す。

※ 十山亭詩碑 佐羽淡齋が小倉山に建てた詩碑。場所は移され、現在はみどり市大間々町要害山の要害神社脇にある。高さ約二m、幅約一m。

※ 小倉山 町の西方、桐生市川内町にある山。

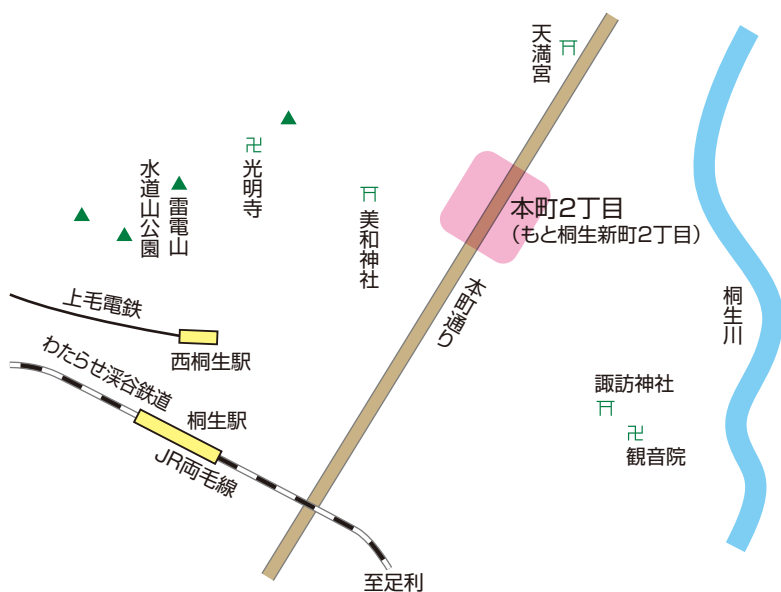
※ 佐羽淡齋 二代佐羽吉右衛門。桐生新町の織物買次商初代吉右衛門の養嗣子。松山藩上州分領の領分取締役をつとめた佐羽清右衛門家は本家にあたる。薄利多売の商法で繁盛した。大窪詩仏の門人で、漢詩人として知られ、三冊の詩集を著した。淡齋と号す。小倉丘に別荘十山亭を建て、全国各地に自作の詩碑十基を建立した。また江戸歌舞伎の中村・猿若・市村三座の元締めでもあった。

※ 顔魯公 顔真卿（七〇九〜八六六）。唐代中期の政治家、書家。玄宗皇帝の七五五年、安祿山

の反乱時には、平原太守としてただ一人義兵をあげ、唐朝のために気を吐いた。その後、魯郡開国公に封ぜられる。李希烈の反乱の際に勅を奉じて彼を諭したが捕らえられ、帰属を勧められたが屈せず、殺された。書は、優美な王羲之風に反発し、楷行草各体に多肉多骨の書風を創始した。

※ 顔魯公の集字 顔真卿の著『顔魯公集』などから碑に彫る字を抜き出した。

桐生市内略図



午飯行厨を携て桐生町より西なる山に登る。町をはなれば三輪の神社あり。これは延喜式内の御神にて、陽成天皇勅額勳十等といふ。続日本紀二八元慶四年五月廿五日戊寅、授_二從五位上加茂神、美和神並_レ正五位下勳十二等_一よし見えたれば、進階の事ハまたその後なるや。神官小嶋大宮司、御朱印なし。この処ハはや荒戸村といふなり、小名を村松と称とぞ。此やしるにつきて行ば、大きやかなる山も小さき山も、たがひにころび逢たるさまにて、けしきいとよし。

昼食の弁当を携えて、桐生の町より西にある山に登る。町を離れると美和神社がある。これは『延喜式』に載っている御神であつて、陽成天皇直筆の額で勳十等という。『続日本紀』(『日本三代実録』の間違い)には、「元慶四年(八八〇)五月二十五日戊寅、從五位上加茂神、美和神並びに正五位下勳十二等を授く(從五位上である加茂神社及び美和神社に対して、共に正五位下勳十二等を授ける)」と由来が見えるから、位階を進めたことはまたその後のことであるのだろうか。神官は小嶋大宮司、(將軍家の)御朱印はない。この所は早くも荒戸村という所である。小字名を村松と称すという。この社の淵に沿って行けば、大きな山も小さい山も互いに転びあつている様子であつて、景色がたいへんよい。

※ **三輪の神社** 美和神社。桐生市宮本町二丁目にある神社。延喜式内社、上野国十二社のうち。当時の山田郡にあつた延喜式内社は、美

和神社と桐生市広沢町にある賀茂神社の二社である。この二社は、延暦十五年(七九六)に官社とされ(『日本後紀』)、元慶四年(八八〇)五月二十五日に正五位下勳十二等を授けられた(『日本三代実録』)。なお、この日、上野国の神社数社が一斉に格上げされた。明治三十四年、美和神社境内に西宮神社が勧請された。境内社ではあるが、西宮神社の方が社殿の規模が大きい。

※ **延喜式内の御神** 『延喜式』は、藤原時平らによつて延長五年(九二七)に編纂された、律令の施行細則。『延喜式』の神名帳に記載された神社を「式内社」といい、格式が高い。

※ **陽成天皇** 清和天皇の第一皇子で、九歳で天皇になる。在位八七六―八四年。勅額については不詳。

※ **続日本紀** 『続日本紀』は、七九七年に成立しており、文武天皇元年(六九七)から桓武天皇十年(七九一)までを記述している。こゝは、元慶四年(八八〇)の記事で、六国史の最後の史書である『日本三代実録』(延喜元年(九〇一)成立)に記載されているが、それと思ひ違いをしている。

※ **加茂神** 賀茂神社。桐生市広沢町にある神社。延喜式内社。「三輪の神社」の項参照。

※ **進階の事**……勅額云々は社伝でも聞いたのである。元慶四年に「勳十二等」を授けられたのに、その近い時期に「勳十等」と聞か

※ **御朱印** 朱印地(將軍の朱印状によつて領有

が安堵された土地)のことか。

※ **荒戸村** 山田郡のうち。荒戸村は、江戸時代、早くから四つに分かれ、それぞれ独立性が強かった。江戸後期には正式に今泉村・村松村・堤村・本宿村に分かれた。明治六年、四村が合併して安楽土村となる。

※ **村松** 山田郡のうち。古代美和神社を中心として集落が営まれたものと考えられる。もと荒戸村の小字名。江戸後期に正式に荒戸村から分かれた。現在の桐生市宮本町あたり。

追記

①『平成校注「毛武遊記」―渡辺華山 天保二年中仙道・桐生道の旅―』涌田佑著、「犀」俳句出版発行、平成十七年。

このほどやっと目にすることができました。たいへん優れた参考書です。特に今回は、岩本家の墓に書かれた人物について、この本のおかげでよくわかりました。

②インターネット上に鮎川俊介氏の『幕末・明治の日本を歩く』が載っています。そのうち6月取材旅行「熊谷―太田―桐生」7月取材旅行「桐生」『毛武遊記』関連の取材です。参向になります。

③華山の文学碑、今秋にも桐生天満宮境内に建立予定。『毛武遊記』から天満宮周辺を描写した一節を右に刻む予定だそうです。

(続)

田原市博物館収蔵品から 渡辺崋山筆『客坐掌記(天保九年)』⑦



秘密曼荼羅大阿闍梨耶付法伝

寛治六年九月五日書ク為往生極楽

増寛

(図) ほろぼろ

秘密曼荼羅大阿闍梨耶付法伝

大治二(三二六)写、重美 紙背 嘉保二年(一〇五九)

具注曆 (国書総目録⑥ 801)

曼荼羅は、曼陀羅とも書く、梵語 象徴的に表した記号

で、悟りの世界や仏の教えを示した図絵。

阿闍梨は梵語 acarya 軌範師、教授、正行、密教で灌頂

を受けた僧をいう。

寛治六年 一〇九二年

増寛 (一〇五九〜三二二)、法名増寛、俗姓藤原、藤原常孝

の男、説、藤原有信の男、静覚法印の弟子、法勝寺、尊勝寺

の上座。

(国書人名③ 62)



(図) 花卉

朗軒沈垣*

周

藩

(図) 蟹

朗軒沈垣 8頁右(『華山会報』第23号11頁)にもあり。清、長州(江蘇蘇州)人、字朗軒、善画士女。(中・426)

「少年物語 渡辺華山」

読書感想文について

財団法人華山会では、郷土の偉人渡辺華山先生の功績を後世に伝承する事業の一環として、



毎年市内小学六年生に対し、「少年物語 渡辺華山」の冊子をプレゼントしてまいりました。感想文の募集を行ったところ、六十三件の応募をいただきました。

この中から優秀賞に選定されました六点の作品をご紹介します。

応募いただきました各学校の皆さんやご協力をいただきました各学校の先生方々に厚くお礼申し上げます。

財団法人華山会事務局

少年物語渡辺華山を読んで

中山小学校 川口 皓平

この本を読むまで、渡辺華山という人は、画家で政治家だということは聞いたことはあっても、実際どういう人がらで、どんな事をした人なのか知らなかったし、田原藩について知ることができたので良かったです。

文章の中で、「なんぎな事、悲しい事にあうごとに、必ず立派な人になって、家の者を幸せにしてやろうと思った。」と、ありましたが、その文章を読んで、ぼくはとても感動し、華山先生という人は、両親や、兄弟思いの優しい人なんだと思いました。

貧しくて、日々の食事にも困り、お父さんの薬を買うのにせいっぱいで、弟や妹がほうこうに出されてしまいました。その時の華山先生の気持ちや思うとむねが痛みます。でも、そんな困難にも負けず、生計を助けるために、得意な絵を売って、生計を支えるようになりました。家老になってからも、自分の生活より、村人など貧しい人達困っている人達のことを一番に考えています。普通なら、人のためにも思っているけれども、欲が出て行動に移すことは、なかなか難しいことだと思うのに。天保の大ききんの際には、報民倉を作るなどして、藩内で一人もがし者を出すことなく、とても優れた政治家だと思いました。そして、来るべき幕末の混乱に警しを鳴らしたのにもかかわらず、華山先生の考えは批判され、心配したおりに、日本は激動の幕末に入っていくことになります。そして、無実であるのにもかかわらず罪人あつかいされ、ちっ居となり、大切な家族のためにと、自作の絵を売り、反感をかい、自刃に追いこまれたのは、とても残念なことです。華

山先生も志半ばでの死だったので、非常に無念だったろうと思います。

田原藩の家老ではありませんが、江戸に住んでいたの、田原での生活は、護送されてから亡くなるまでの一年程しかありませんでしたが、田原にたいへん大きなものをたくさん残してくれたような気がしました。

ぼくは、この本をきっかけに田原の街が、いつもと違って見え、今まで以上に好きになりました。華山先生が、田原に来ていなかったら今の田原は変わっていたかもしれません。そして、今まで気づかなかった事が発見できました。たとえば、橋のらんかんに華山先生の絵がえがかれてあったり、三河田原駅の駅舎が報民倉をイメージして造られたものかなと想像してみたり、探せばもともとあると思うので、見つけてみたいですね。華山先生は、今でも田原の人々から敬われ、信頼され続けているヒーローなのだと感じました。華山先生は、この田原のほこりです。

そして、まだ行ったことがありませんが、華山先生ゆかりの地や、遺せきをおとずれたり、絵画を鑑賞してみたいと思います。

ぼくは、今の日本に欠けているであろう、親、兄弟を大切にすることを習い、たくさん勉強して、知識をたくわえたいです。そして、華山先生に田原を見守ってもらいながら、故郷田原をずっと大切に守り続けていきたいと思います。

少年物語渡辺華山を読んで

高松小学校 光部 紘都

ぼくが初めて渡辺華山先生を知ったのは、五年生の時の校外学習です。田原の町の史跡めぐりをしたときに、

担任の先生に華山先生のお墓に連れて行ってもらいました。そこでどんな人かを説明してもらい、すごい人があるんだなあと思いました。今回「少年物語 渡邊華山」を読んで、華山先生の子どもの頃のことから、大人になってどんな仕事をしたのか、どんな人物だったのかを詳しく知ることができました。

華山先生は、江戸時代に江戸（今の東京）に生まれました。子どもの頃は貧乏でした。大人になって役目もえらくなり、田原藩のためにつくりました。絵がすごく上手で絵を売って生活もしていました。しかし、外国の事情を知り、日本のためには、外国のことをもっと調べて外国とつきあつていかないとけないと言ったために、罪人になってしまいました。「罪人が絵を売って金もうけをしている。」といった自分に対する色々なうわさや悪口があつて、殿様に迷惑がかかると思ひ切腹してしまいました。

ぼくが、一番心に残つたところは、大名行列にぶつかつてしまつたところです。華山先生のお父さんは、病気がちでした。お父さんの薬を買つて大急ぎで家に向かつている途中に大名行列にぶつかつてしまいました。そのときに、ひどい目にありました。大名行列のおかごにのつている池田公の若君を見て、

「あの若君は生まれつきがよいばかりにあのように…。それであるのに自分は…」

と、いばつた若君の上に立つような人になりたいと、華山先生はここからもっと勉強しようと思ひました。つらい目にあつてもそれをばねにするところがすごいと思ひました。

それから、外国のことを勉強しようとしたことも心に残りました。華山先生は、勉強をする中で自分たちの国がいき遅れていることを知つて、外国の文化など

をもつと取り入れようと思いました。殿様などから、「外国のことを知つてはならん。」

と言われても、必要性を感じて、何度も何度も長崎に行こうと挑戦していったことです。どんな困難にも立ち向かつていく姿勢がすごいと思ひました。華山先生は、願ひはかなうと思ひます。

華山先生の物語を読んで、ぼくは、去年のマラソン大会のことを思ひ出しました。練習のときは、いつも三位でした。でも、毎放課みんなより速いスピードで走つたり、家に帰つてからも走つたりしました。その結果マラソン大会では、優勝することができました。がんばれば願ひがかなうということをマラソン大会が証明してくれました。

まだ、ぼくは将来何になるかは、きまつていません。でも、どんな困難も乗り越えていく人になりたいです。

少年物語渡邊華山を読んで

田原南部小学校 中 神 唯 斗

ぼくは、この本を読んで、華山は、すごい人で、やさしく、周りの人をととても大切にしている人だな、と思ひました。

子供のころ、大名行列にぶつかつてしまつた時、なんどもあやまつたのに、ぶたれたりけられたりする場面では、身がちがうだけで、こんなにやられてしまい、とてもくやしかつたと思ひます。ぼくだつたら、すぐくおこつていたと思ひます。でも、華山は、それから勉強をがんばつて、自分よりもえらい人に、ものごとを教える学者になろうと決心し努力して、本当に学者になつてしまふのは、すごいと思ひました。

ぼくは、今まで、くやしと思つても、そこから努

力を続けることは、したことがありません。すぐにあきらめてしまつていました。これからは、華山を見習つて、簡単にあきらめず、がんばり通せるようにしていきたいです。

華山が、蘭学の勉強をしている時に、九州に行つて、勉強したいと思つた時には、自分のやりたい事をがまんして、お父さんを看病することを優先したり、家老の時には、田原の人々のことを考へて報民倉を作つたりと、周りの人のことをとても大切にしているやさしい人だと思ひました。だからこそ、華山の周りの人も、華山のために、いろいろやさしくしてくれたのだということも分かりました。

華山が、日本の将来を心配して、憤機論を書いたのに、幕府の批判をしたとして、考へが伝わらなかつただけでなく、罪人として、捕まつてしまつたのは、とても残念に思ひました。その後の歴史を考へると、華山の言うことが、正しく伝わつていたらどうだつただろうとも思ひました。

罪人として、田原に送られてきた時、心ない悪口にたえ、家族に迷惑をかけていることを考へると華山はとてもつらかつたと思ひます。ぼくも家族に迷惑をかける時もあります。その時は、しまつたなあと思ひ反省します。とてもやさしくて、他人のことを大切にしている華山は、胸がさかれてしまうような苦しい思ひをしていてと思ひます。そして、大切な、田原の殿様にも、迷惑がかかるかもという心配から、自分の命を絶つてしまつたことは、すごく悲しいですが、華山らしい最期だつたと思ひます。

不忠不孝、渡邊登と書いて、華山は死にました。確かに、親より早く死んだことや、殿様に迷惑がかかることをしてしまつたことは不忠不孝かもしれせん。でも、

誰よりも、殿様のことを心配し、親や家族のことを考
えていた華山だったと思います。

ぼくは、華山のように、やさしく周りの人を大切に
できる人になりたいと思いました。

自分のことだけでなく、周りの人のこと、地域のこ
とまでも考えていける人になりたいです。そのため
も、もつともつと努力していきたいと思いました。

華山先生のように努力し真っ直ぐに

田原東部小学校 船木歩澄

学校でこの本をもらったとき、ぼくは、渡邊華山と
いう人物にとっても興味をもちました。華山先生が有名
で偉い人ということは聞いたことがあったのですが、
本当はどんな人なのかわからなかったからです。

華山先生は、とても努力家で心の真っ直ぐな人だと
いうことを、ぼくは、この本を読んではじめて知りま
した。

華山先生は、寛政五年の秋に江戸で生まれ、お父さん
の勤めているお屋敷の殿様から虎之助という名をもら
いました。小さい頃の華山先生は、おとなしくて、おこっ
たり、いたずらしたりするようなこともめつたになく、
友達からはなれて、一人で好きな絵を地面に描いて遊
んでいたそうです。ぼくは、友達と遊ぶのが好きなので、
一人でおとなしく遊ぶのはできないなあと思いました。
子どもの頃の華山先生は、今のぼくとだいぶ違うよう
です。

華山先生の家は貧しくて、好きな絵を習うことも二
年で断られてしまいました。貧しくて本を買うお金も
なく、それでも一生けん命勉強して、自分の描いた絵
を売って家計を助けていたそうです。華山先生は、大

変なことや悲しいことがあるたびに、必ず立派な人
になって家族を幸せにしたいと思っていたそうです。貧
しさに負けないだけでなく、立派な人になり、家族を
幸せにしようと思う華山先生は、本当に努力の人、心
の真っ直ぐな人だと思います。

華山先生は、大人になってからも変わることなく、両
親のため、自分のために毎日勉強と武士の努めを両立
し、大変忙しい日々を送ったそうです。それでも、ど
んなに忙しくても絵の勉強をして、どんなときでもす
ぐに絵が描けるように、いつも小さな帳面を持ち歩い
ていたそうです。描いた帳面を積み上げると、背の高
さぐらいあつたそうなので驚きです。その帳面の多さ
だけでも、華山先生がとても勉強家で、心に決めたこ
とをやり通そうとする立派な人だったことがよくわか
りました。

ぼくは、めあてを決めてもしつかり守れたことがあり
ません。また、自分がどんなに恵まれた環境にいるのか
も考えたことがあります。ぼくは、華山先生と同じ
長男で、弟が三人います。しかし、弟と一緒に遊ぶの
をめんどくさがったり、家の手伝いをするのもお母さ
んに言われていやいややったりします。この本を読ん
でからは、もつとまわりのことを考えて、自分からや
れることを見つけたいやねばと思うようになりました。

華山先生は、無実の罪でとらえられ、この田原へ送
られて来ました。それでも人を憎むことなく、家族や
まわりの人のことを思いながら死んでいきました。

この本を読み、華山先生のように努力し、真っ直ぐ
な生き方をしたいと思いました。そしてたくさんのこ
とをもつと学びたいです。

渡辺華山を読んで

堀切小学校 山口登生

ぼくがこの本を読んで最初に思ったことは、正直、
この時代に生まれなくてよかったなあということでは
す。でも、渡辺華山の生き方を知って、ゲームごんまいの
毎日を少しだけ反省しました。

渡辺華山は子どもの時からあまりお金がなかったそ
うです。今の時代でも「貧ぼう」という言葉は聞きま
すが、ぼくはあまり考えたことはありません。テレビ
のバラエティー番組でやる貧ぼう生活はおもしろいも
のばかりで、ぼくはそれが貧ぼうだと思っていました。
今のぼくは、リモコン一つでエアコン、テレビなどが自
由に動かせます。そんな生活は普通すぎて特別なこと
とは思ったこともありません。なので、いろいろつけっ
ぱなしにしてしまい、よく親におこられます。電気代
がかかることも、節電が大事なことも知っているけど、
反省できませんでした。もちろんゲームからものはな
れることはできませんでしたが、それはダメだと思っ
うになりました。

この本を読み終わった後、ぼくは渡辺華山の銅像が
見たくなり、お父さんに頼んで連れて行ってもらいま
した。写真で見るとよりかは力があって、周りの人の
ためにがんばった渡辺華山のすごい感じが伝わってき
ました。

そんなすごい人も、最期は自殺をしてこの世を去って
しまったそうです。「武士らしく」と書いてありました
が、ぼくにはよくわかりません。でも、それを知って
考えたことがあります。それは、今問題になっている
「いじめ自殺」についてです。いじめている方が悪いと

と思いますが、自殺をしてしまうのは命がもつたいたい
 と思います。どうしようもなく死んだ方がましと思っ
 たのかもしれないけれど、死んだら何もできません。も
 ちろん親にも友達にも会えません。本当にそれでいい
 のかなとぼくは思います。ぼくだって、楽しいことば
 かりじゃありません。親におられたり宿題に追われ
 たり嫌なこともあるけど、やっぱり自殺は考えません。
 この先、つらいことはもつと増えていくと思います。そ
 れでもそれを乗りこえてぼくは大人になるんだと思っ
 し、そう思える大人になりたいです。

もう一つ、渡辺華山から学んだことがあります。それ
 は親への感謝の気持ちを持つことです。ぼくは今、こう
 してなんの不自由もなく当たり前に学校に行って、たく
 さん勉強をし、友達と思い切り遊ぶことができていま
 す。それは、親が毎日一生けん命働いてくれているか
 らです。ぼくが休みの日に遊び放題で宿題もあまりや
 れていないときでも、親は働いてくれています。渡辺
 華山は親や家族をいつも思いやっていました。ぼくも、
 毎日この普通の生活をさせてくれる親に感謝したいと
 思いました。

渡辺華山の生き方からいろいろなことを考えること
 ができました。人として当たり前のことばかりですが、
 実行するのは難しいです。でも、学んだことを目標にし
 て、毎日を大切に、楽しく生きていきたいと思いました。

華山先生から学んだ事

伊良湖小学校 山本 悠華

渡辺華山先生は幼いころ、とても貧しい家で生まれ、
 苦しい生活を送ってきました。そんな苦しい生活でも
 勉強をしっかりやり、何事もと中であきらめず、最後

までやりぬいていました。そんな華山先生はすごいな
 と思いました。

まず私は、華山先生が殿様の行列にぶつかって、そ
 の殿様が自分と同じくらいの人だとわかり、大学者に
 なるうと思つた場面では、華山先生が負けずらいだ
 ということや、嫌なことがあつても、ふんばつて自分
 を伸ばしていく姿に感動しました。

華山先生は、絵を描くことが小さいころから上手で
 した。絵が上手だったので、生活がとても苦しかった
 とき、絵を描いて、その絵を売つて生活を支えていま
 した。貧しくても父親や母親を助けようとした華山先
 生は、とてもやさしく、心が強い人だなと思いました。
 華山先生はその心のやさしさと強さで、日本をよくし
 ていったのだと思います。それに華山先生の父親が病
 気で大変なとき、病気をなおす薬を買いに行つたり、
 家事をしたり、弟や妹の世話をしたりする中でも、絵
 を描くことや勉強を続けていました。私だったら二つ
 のことをずっと続けていくことはむずかしいと思いま
 した。私も見習つて、継続して努力することをしてい
 きたいと思いました。

華山先生が家老になつた年の夏に、紀州藩の船が難
 破し、たくさん荷物が流され、渥美半島の表浜の海
 岸に打ち寄せられたときには、海岸の人たちはその荷
 物を拾つて、家に持ち帰りました。しかし、その時の
 紀州藩は日本中の殿様の中では最も勢力が強かつたの
 で、その紀州藩の荷物をぬすんだとすると大変なこと
 です。そこで先生は、すぐに紀州藩にわけを話にい
 たり、知り合いの人をたよつて幕府に申し開きをしに
 いったりして、やつとのことので集めた少しばかりのお
 金を出して、内々にすまふことができました。村人た
 ちはお札に、みんなでお金を出し合い、華山先生に渡

しましたが、華山先生はそのお金を村人に渡し、
 「村でなにか入り用があつたら、つかつてください。」
 といいました。華山先生はきつとまだ貧しかったのに。
 お金をもらわなかつたのは、華山先生がむかし、今よ
 りずっと貧しい生活を経験していたからだだと思います。

華山先生が書いた「慎機論」は、外国に比べて日本の
 科学は劣つていることが書かれています。さらにこんな
 非常時に、政治をしている人は自分の利益ばかり考へて
 役にも立たず、学者も考へ方がせまく、大きいところ
 に目をつけず、正しい国の方針を決めようとしません。
 こうして何もすることなく、外国から攻められたらど
 うするのでしょうか、ということが書かれていました。
 この文章は内容もくわしく書かれていて、華山先生が
 主張したいことも書かれており、説得力がある本でし
 た。その後華山先生は人々から、そんけいされるようにな
 りましたが、そのことをねたましく思っている鳥居
 ようぞうという人に無実の罪をきさせられて牢に入れ
 られてしまい、さらに皮ふ病にかかつて苦しみました。
 そんな時もお母さんのことを思っていました。先生は
 お母さん思ひですごいなと思いました。

この本を読んで、名前だけしか知らなかつた渡辺華
 山という人の人がらなどがわかりました。また、人生
 の一部始終をみて、歴史は大きく変わることがわかり
 ました。先生のような正しい心の持ち主がたくさんい
 れば日本がもっとよくなると思います。

華山の田原行(十三)

二月十九日(続)

「(空字)の頃、青津の伝法寺池にて阿大王の宝鐸を掘出せし時ハ、紫檀にて其かねの下にうけ木を製し、紐にも貫きありしなり。その傍に髑髏ありしが、これを掘せしものわづらひたりとぞ。其木ハ蘇枋スホウの木ともいふ。」

前回は紹介しましたが、萱生玄順と話題にした銅鐸について、華山は右のように記しています。銅鐸が見つかったのは寛政四年(一七九二)なので、空字の部分には、「寛政」と記すつもりだったのでしよう。銅鐸の発見が二月十七日だったので、昔の同じ時期の出来事として話題になったのでしょうか。

田原藩の公式な記録である『御祐筆日記』には、銅鐸が発見されたのが谷ノ口ニの金堀池とあるのが、「青津の伝法寺池」は、華山・玄順どちらか分かりませんが、誤りです。この記述で興味をひかれるのが、髑髏のことです。『御祐筆日記』には記述がないのですが、華山がこの『客参録』を書いている天保四年(一八三三)に四十年以



上も前の出来事が話題になるのは、今でいう「祟り」というものを当時の人が恐れ、言い伝わっていたのかもしれない。さらに、古代の田原には、死者と銅鐸を一緒に埋葬する風習があったのかもしれない。

紫檀とは、マメ科の常緑広葉樹で、仏具にも利用されますから、「阿大王の宝鐸」とあわせ、古来からの風習で、田原藩では、銅鐸を仏具と考えていたのかもしれない。仏具だけに、掘

り出した者が「わづらひたり」と、仏罰が下ったと考えたのでしょうか。

「とぞ」という伝聞の表現の後に、「其木ハ蘇枋の木ともいふ。」とあるので、これは華山の紫檀についてのコメントと思われる。蘇枋は、マメ科の落葉小低木です。紫檀と蘇枋は、同じマメ科でも別の木ですが、中国では、木材を蘇枋で染めて紫檀のイミテーションを作っていたので、当時は、蘇枋で染めた木材も紫檀と言っていたのでしょうか。蘇枋の心材は、絵の具としても使われていたので、華山は、このあたりのことに詳しくあったと思われる。

次に、三宅氏のことを書かれています。これも玄順との話題と思われる。

「三宅日向守(空字)山の神職なり。これハ三川三宅の祖なりともいふ。于今御札ハ此方へもさし上ルとぞ。三宅藤右エ門、梅坪三宅の旧家なり。靈巖寺主此方に笠仕セインの事を進むれど聞入れず。今ハいとふれたりとぞ。」

三宅氏の祖は、南北朝時代の南朝の忠臣・児島高德と言われていますが、児島高德は、『太平記』上の人物という説もあり、実在が問題となっています。

華山にとり「猿投」という地名は耳慣れないものだったのか空字にしてあり「サナゲ」とル

ビがつけてありますが、華山の記す猿投山とは、猿投神社（豊田市猿投町大城）のことで、砥鹿神社（豊川市一宮町）、知立神社（知立市西町）とともに、三河国の三宮の一つです。猿投山の麓に猿投神社の本社、山頂に東宮と西宮があります。なお、三宅日向守については不詳ですが、「戦国大名探究」(<http://www.2harimaya.com/tankyu/index.html>)の三宅氏の項に、「明応二年（一四九三）六月に完成した猿投神社の棟札に「大施主三宅筑前守家次」とある。」とあります。華山は、このことを記しているのでしょうか。

三宅氏は、梅坪城（現豊田市梅坪町）を居城とし、三宅正貞（政貞）の代の永禄元年（一五五八）に、家康（松平元康）の家臣となります。三宅藤右エ門とは、この正貞のことと思われませんが、「靈巖寺主此方に笠仕のことを進むれど聞入れず。今ハいとふれたりとぞ。」（靈巖寺主が占って仕官を勧めたが聞き入れず、今は零落しているという。）という記述と合致しないので、分流のことなのかもしれません。

正貞の子が、田原藩三宅家初代となる康貞です。康貞は、家康の関東移封に従い、天正十八年（一五九〇）、武蔵国瓶尻（埼玉県熊谷市）で五千石を領します。

天保二年（一八三二）に華山は、「以命赴瓶尻

訪問上祖事蹟留凡二十日」（『訪貳録』）と、三宅家系調査の藩命を受け、瓶尻を訪れ、康貞の事績を調査し『訪貳録』を著します。この記述にあるように、正貞が田原藩の上祖です。

『訪貳録』については、『全楽堂日録』の天保三年（一八三二）七月二十八日の項に、「終無事、



三宅家の菩提寺「靈巖寺」

訪貳録凶揮洒、同書再浄写、三好俊平方へ差遣」七月二十五日の項に「けふは訪貳録序を作ル」とあります。その後『訪貳録』がどうなったか記述はありませんが、この天保三年の七月に、本稿の第一回で紹介した紀州難破船貨物横領事件が起き、今回の田原行までの半年間、この事件の收拾にあたることとなります。『訪貳録』の執筆どころではなかったのかもしれませんが。

三宅家系調査については、四月十五日以降のことを記した『参海雑志』に、「御系譜の御用、巢鴨老候の三河志の御用をかねて」とあるので、継続していると思われる。

その後、康貞は、慶長九年（一六〇四）、一万石に加増され、三河挙母藩主となり、三宅氏が挙母藩を治めます。そして、寛文四年（一六六四）、康貞の曾孫の康勝（田原藩三宅家四代）が田原藩に移封され、華山の時代に至ります。

華山の記す「靈巖寺」は、次に記してある「靈巖寺涅槃像ハ志田利兵衛の畫、此志田といふものハ御当家の御家来ともいふ。」からすると、田原市田原町の三宅家の菩提寺の靈巖寺と思われるが、前述の「今ハいとふれたりとぞ。」からすると、三宅氏の挙母時代の菩提寺である靈岩寺（豊田市平芝町）とも思われます。（続）

研究会員 柴田雅芳

財団法人華山会 田原市博物館 から ご案内

企画展のご案内

九月二十九日(土)～十一月十一日(日)
秋の企画展 再発見 日本の書画の楽しみ
暮らしに息づく山形・長谷川コレクション

(企画展示室1・2)

長谷川コレクションは、山形銀行の経営に携わり、美術への造詣も深かった初代直則氏以来、代々引き継がれ、江戸時代から近代にわたる作品が知られています。今回、京都四条派や明治期の文人画の名品を展示させていただくことになりました。日本の四季を感じさせる作品群は、まさに日本の風土そのものといつていいでしょう。本展ではテーマを12に分け、暮らしに息づく日本の書画の楽しさを再発見していただきます。

橋本関雪筆煉炭、渡辺華山筆蟬螂図、菱田春草筆狐嫁入図など

同時開催・文人画を中心に、彭城百川・岡田半江・帆足杏雨・渡辺華山 (特別展示室)

一月五日(木)～二月五日(日)
新春企画展 ふるさとの偉人 生誕100年 杉浦明平の眼

(企画展示室1・2)

杉浦明平は大正二年(一九一三)、愛知県渥美郡福江町(現田原市折立町)に

生まれました。東京帝国大学国文学科で、立原道造や寺田透ら



と同人誌を創刊。第二次世界大戦中、郷里に戻り、のちに町議会議員を務め、その間の見聞を元に、『ノリソダ騒動記』『基地六〇五号』『台風十三号始末記』『夜逃げ町長』などのルポルタージュ記録文学が注目を集めた。畑仕事にいそしみながら、渡辺華山をはじめとした江戸時代の文人を取り上げた小説や評論、食べ物エッセイ、翻訳などの多分野で活躍。

今回は、杉浦明平の刊行作品や未発表の書簡などを通し、新たな「みんなさん」の魅力を探ります。

展示解説 一月十三日(日)・二月三日(日) 午前十一時

同時開催・華山生誕二二〇年重要文化財 渡辺華山関係資料 (特別展示室)

渡辺華山筆孔子像、一掃百態図、馬図(絵馬)、孔門十哲像などを展示します。

十一月十七日(土)～十二月二十四日(月・祝)

平常展のご案内

渡辺華山と小華 (特別展示室)

華山とその子、小華の作品を展示。渡辺華山夏山欲雨図、渡辺小華筆花籠四友図ほかを展示します。

ふるさと学習 田原の歴史―田原藩士村上藩致、井上華陵 (企画展示室1)

没後70年山下青厓・鍋木華国 (企画展示室2)

示室二)

二月十六日(土)～四月七日(日)

渡辺華山が描く春 (特別展示室)
田原市指定文化財渡辺華山四季山水画冊・春秋山水図などを展示します。

ひな人形と初風展 企画展示室
田原の旧家に伝わったひな人形や田原風保存会制作の初風などを展示します。

常設展示室では渡辺華山の生涯を展示しています。

民俗資料館では田原の暮らしを中心に展示しています。

渥美郷土資料館・赤羽根文化会館展示室でも所蔵品を展示しています。

観覧料
秋の企画展 一般五〇〇円 (四〇〇円)
新春企画展 一般四〇〇円 (三二〇円)

企画展開催時は小・中学生無料
平常時 一般 二二〇円(一六〇円)
小・中学生 一〇〇円(八〇円)

休館 毎週月曜日(祝日の場合はその翌日)、展示替日、十二月二十六日～一月四日

(財)華山会から
華山・史学研究会会員募集中

申込場所 華山会館事務室
毎月第四土曜日研究会
視察研修(年一回)に参加できます。

田原市博物館友の会会員募集中

入会申込書に年会費千円を添えてお申し込みください。

特典

博物館への無料入館
展覧会・催し物のお知らせ
見学会に参加できます。

博物館だより(年数回)・華山会報をお送りします。

華山会報 第二十九号

平成二十四年十一月一日発行
編集発行 財団法人華山会
理事長 白井孝市
常務理事 菰田稀一
事務局 長 讚岐俊宣
千四四一―三四二一

愛知県田原市田原町巴江二二の一
TEL 〇五三一・二二・一七〇〇
FAX 〇五三一・二二・一七〇一

編集協力
田原市博物館
華山・史学研究会

吉川利明 山田哲夫
林 和彦 別所興一
林 哲志 中村正子
小川金一 柴田雅芳
加藤克己 中神昌秀
藤城精一 石川洋一
小林一弘 増山禎之
磯部奈三子

※華山会報ご希望の方は華山会館・田原市博物館にお申し出ください。
次回発行予定 平成二五年四月一日